
傭兵さんのただ働き物語

夢幻

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

傭兵さんのただ働き物語

【Nコード】

N9075W

【作者名】

夢幻

【あらすじ】

これは少し不思議な世界のお話。

どんな世界にも人が集まれば街ができ、街が賑わえば人が集まる。しかし、表では生きられない人がいるのもまた事実。表の街があるならば、裏の街もあるのもまた事実。

そんな裏の街をぶらつく傭兵の主人公はとある街で謎の集団に追いかけられている女性に出会う。助けを願われた主人公は対価に何を支払うかを問う。彼女はこう答えた。

「私の命でどうですか？」（「6倍数の御題様」よりお借りした御

題を使用した作品です)

はじめに

どうも。夢幻です。

自分自身のさらなるスキルの向上を目指します！

色々な方々がやられている「御題に沿って小説を書いていく」ということをしていきたいと思えます。

使用する御題は「6倍数の御題」(<http://www3.tou6title.com>)さんから借りました。

借りた御題はこちら。

- 30の創作の御題3
- 1．突然の出来事
- 2．高鳴り
- 3．レンガ
- 4．役割分担
- 5．落とし物
- 6．最低限
- 7．使い方
- 8．セキュリティ
- 9．扉
- 10．旧友
- 11．輝石
- 12．パートナー
- 13．かつての言葉
- 14．必需品
- 15．微笑み

16	・	甘く見る
17	・	記憶の片隅
18	・	決意
19	・	カバン
20	・	夢心地
21	・	プレゼント
22	・	敬語
23	・	幸せの花
24	・	敵わない
25	・	それだけのこと
26	・	引き離す
27	・	真実
28	・	うねり
29	・	迷わない
30	・	知らない明日

基本的に一話一題の形で書いていきたいと思えます。極端に短編になることもあるかと思いますが、そこら辺はご了承ください。

あらすじ

これは少し不思議な世界のお話。

どんな世界にも人が集まれば街ができ、街が賑わえば人が集まる。

しかし、表では生きられない人がいるのもまた事実。表の街があるならば、裏の街もあるのもまた事実。

そんな裏の街をぶらつく傭兵の主人公はとある街で謎の集団に追いかけられている女性に出会う。助けを願われた主人公は対価に何を支払うかを問う。彼女はこう答えた。

「私の命でどうですか？」

リンク

6
倍
数
の
御
題
:
h
t
t
p
:
/
/
w
w
w
3
.
t
o
/
6
t
i
t
l
e

お仕事その1 突然の出来事

それは夕方の出来事だった。

午後の時間帯にとある雇い主からの仕事を終わらせて報酬を受け取り、いつものようにその街の宿屋を探していたときのことだった。赤く染まりつつあるコンクリートの街並みを目に移しながら、俺は歩いていった。この街についてよく知らない俺は道なりにただひたすら進んでいる。古びた高いビル群に囲まれた通りはおそらく表社会には生き辛い人たちの恰好の住処だろう。かくいう俺も似たようなものだ。

宿を探し始めて二時間は経過している。いい加減うんざりしてきた。変わらない街並みがより一層気を滅入らせる。もう日は落ちてしまったのか、少しずつ街灯に明かりが灯りはじめる。

「これは野宿かな」

野宿でも別に構わないが、飯にはありつきたい。どこか店を探さなければ。そう思ったその時だった。横の細い路地から突然女性が飛び出してきた。職業柄突然の出来事には慣れていると言っても過言ではないため、ぶつかるといふ状態を避けてしまった。おかげで女性はと言つと。

「あなた一体誰ですか!」

どうやら待ち伏せを喰らったと踏んだらしい。

「ああ? いきなり出てきて何言つてんだ。お宅が何に巻き込まれてるかしらねえけど、俺は」

「ごめんなさい。急いでるんで」

女性は俺が進もうとしていた道をそのまままっすぐ走って行った。

「あ、おい」

勘違いをしておいて、さらに勝手に謝るなんて。人の話くらいは最後まで聞いておいた方がいいと思う。なぜなら。

「おい、今ここに若い女が出てきただろう」

「ああ？ だから、いきなり出てきて何だっというんだ」

「こういう事件に巻き込まれているなら、俺みたいなやつが役に立つからだ。女性が出てきた路地からは、今度は女性の代わりに黒いスーツ姿の男達が三人飛び出してきた。どこからどう見ても裏社会の下っ端という感じだ。その中の一人がいきなり言葉を飛ばしてきたのだ。そして、そいつは俺の容姿を上から下まで隈なくチェックするかのようになると、さらにこう言った。

「ん？ 見たところお前傭兵だな」

「あららご名答。そして、あいにくだけどあんた方みたいな奴に雇われる筋合いは無いからな。金ならもうあるんでね」

俺はさっきの仕事で手に入れたじゃらじゃらした報酬の入った袋を懐から取出し、見せつけた。

「ふん。ならば、ある質問に答えるだけで金を払うと約束しよう」

「……どんな質問だ」

「その女はどこに行った。正しく答えれば金を払う。正しく答えなければ、コイツをくれてやる」

「そう言うത്そいつは腰に身につけていた銃を右手に構え、俺に銃口を向けてきた。」

「ワオ、正しく答えなかったら銃がもらえるのか」

銃声と共に俺の背後にある古い建物の窓が割れる音が聞こえた。

男の目を見るとこれ以上の言う機会はくれないらしい。短気なことで。俺はため息を吐きながら、俺の進もうとしていた道の方へ指を指しながらこう言った。

「この道を行って行った、真実だ。さあ金をくれよ」

「ふん、奴を追え」

「はっ」

他の二人に指示をすると、男はポケットから金貨を一枚取り出した後、俺に向かってそれを放り投げた。俺は至近距離で投げられたそれをなんとか右手でキャッチする。俺は金貨をじっくりと見つめた。偽造かどうか確かめるためだ。

「ふっ、本物だよ。そんな所で嘘ついてちゃウチらの商売にも傷が付いちまうからな」

「……どうも」

それだけ言うと黒いスーツの男は先に行った男達の後を追いかけた。そして、俺はと言うと。

「まあ俺が進むのもそっちなんだけどな」

お仕事その1 突然の出来事（後書き）

リンク

6倍数の御題：<http://www3.totitle>

お仕事その2 高鳴り

その後、偶然ではなく必然として再び現場に出遭う俺。

相も変わらず追いかけられている女性とそれを追い回す黒スーツ男性が三人。表で生きる人たちが寄り付かない古い街並みにぴったりのシチュエーションだった。日はすっかり落ちてしまい辺りを闇が包み込もうとしていた。それを防ごうとする街灯の明かりがぼんやりと辺りを照らす。どうやら電気はまだ通っているようだ。

そして、俺が再び出くわしたその場面はこう。逃げようとひたすら逃げていた女性が行き止まりに差し掛かったところを、そうなるように仕組んだかのように黒スーツ姿の男性三人が銃を向けて構えている。ベタな展開だ。俺は黒スーツ達の後ろから姿を現した。なぜか。それは簡単だ。

「……金は支払ったはずだが」

黒スーツ姿の一人が俺には背中を見せたまま口を開く。なるほどリーダー格なのは伊達ではないということか。

「そうだな。しかし、俺はこの街の構成をよく知らないからな。道なりに沿って歩いてきただけさ」

これが真実だ。ぶらつくにしても「じゃらじゃらの報酬」を持つたまま裏路地に入ろうとは思わない。だから、大通りを歩いてきた例え、人が追われている現場に出くわしたあとでもだ。

どうやら逃げ場を失って絶望していた女性は俺の登場により、逃亡の機会をうかがっているようだ。目が違う。現場に出遭った直後の目は苦悩の目をしてしていたが、今は僅かな可能性をも逃さないような獣の目をしている。

「邪魔はしない方がいい。なんならもう一度金を渡そうか？」

黒スーツは俺に言葉を飛ばしながら、銃を構えていない左手から金貨を見えるように空中に放り投げた。そして、落下してきたところを再び左手の中へ収める。確かに金貨であることを確認した俺は

「ヒュ〜」と口笛を吹いた後、女性に向かって言葉を飛ばした。

「おい、女。お前、何か支払えるモノあるか」

「……」

「傭兵。勝手にしゃべりかけるな。次に話しかけたら邪魔をしたと見なすぞ」

「なんだよ、会話ぐらい別にいいだろうが。えらく生真面目な方なこと」

「あ、後払いでお願いしますっ！」

その言葉は響いた。俺が黒いスーツ姿の男達を茶化していた空気すらも沈黙へと変えて。突然の言葉に呆然と立ち尽くすだけの男が四人。だが、俺はすかさず口を開いた。笑いをこらえながら。

「ぶっ、分かった。後払いだな、くくっ」

駄目だ、笑いが漏れてる。そして、俺は続けてこう問う。

「それで何をして欲しい？」

「見れば分かるでしょう、この状況を助けてください！」

「了解」

その言葉と同時に俺は傭兵からの的へとクラスチェンジした。黒スーツの男達三人は俺の体の部位をそれぞれの的とみなしたようだ。全員が俺に銃口を向けてこちらを見ている。どうやら完璧に敵とみなしたようで彼らの目もまた獲物を狩る獣の目をしている。裏の人間の目をしている。

戦いは避けられないようだ。古いビル群、薄暗い夜、わずかな街灯の明かりと言った戦闘フィールドで俺は黒スーツ姿の男三人と戦闘をするのか。この状況で言うところの狂人のように伝わるかもしれないが、正直に言うところ胸の高鳴りが抑えられない。言っておくが戦闘狂という訳ではない。

報酬が何か分からないために、この仕事を面白く感じているからだ。

お仕事その2 高鳴り（後書き）

リンク

6倍数の御題：<http://www3.tottitle>

お仕事その3 レンガ

何が起こるか分からないのが日常であり、それに対して備えておくのも日常である。

いきなり黒いスーツを着た男三人に銃口を向けられるかもしれないと備えておくこと自体は、裏の街で生きる俺にとっては大した備えではない。という訳で俺は素早くズボンの右ポケットに手を入れ、中に入れておいたとあるスイッチを気づかれないように押した。

「今、何をした」

どうやら気づかれないように行動したつもりだったのに、リーダー格の奴には気づかれていたようだ。俺はそいつのその言葉に反応するように顔にやりと笑みを浮かべ、目を瞑った。俺のその行動が引き金を引く原因となったのか、その直後に銃声が鳴り響いた。

だが、それでも遅いのだが。

それらの銃声はすぐさま聞こえなくなった。なぜなら、俺の備えておいたモノが正しく届いているなら目の前に、それが落下してきただけだからである。

「……なんだ、何が落ちてきたっ!?!」

俺は目を開ける。どうやら落下の際に地面を大きく抉ったようで、目の前はまるで意図して作り出したかのような土煙が視界を覆い隠していた。好都合だ。おそらく落下してきたものは地面に突き刺さったままだろう。ならば、それを手に取ることで今晚の命は助かる。俺は仕方なく土煙の中を前に進み始めた。早足で。視界が良好になるまで、またはもう一度銃声が聞こえるその時までがタイムリミットだ。黒いスーツ姿の男達が女性を排除する目的で追っているわけではないのは、俺とのこのやり取りで分かった。

本当に排除するだけの目的なら俺にかまう必要が一切無いからだ。発見したら即殺して十分だろう。

そして、ちょうど右足、左足、右足の順番で前に進んで行ったところにはそれはあった。右足に何か当たったのだ。その場所で右手を使い前方に柄を探す俺。何かに右手が当たる。握れるかどうかを確認した後握ってみる。間違いない。

良かった。過去に一度仕事の最中に今回と同じように呼び出した際に、間違えて物干しざおを掴んだことがある。恥ずかしかった。俺はそれを今度は両手で握り引つ張り上げる。その時、ちょうど砂煙が晴れはじめた。相も変わらず三人の男達はこちらを向き、銃口を向けていた。おそらくリーダー格の男が指示したのだろう。そして、彼らの後ろに女性がいるかどうかを確認するが　どうやら逃げ出したようだ。

まあそれでもいい。

あんまり気にして歩いていなかったが、レンガの道路だったようで先程の破壊でレンガの破片があちこちに吹き飛んでいるのが見える。しかし、今はそれどころではない。銃を構える男たちが叫ぶ。「何をしたかは知らないが、今度こそ生きていられると思うなよ」「俺が言うのもなんだけどそれ死に台詞じゃないか」

俺は両手で握ったそいつを思いっきり引き抜くと、そいつを今度は地面に叩きつけるように前へ振り下ろした。地面に当たった際の衝撃は先ほどまでとはいかないが、目の前で銃口を構える男三人を驚かせるぐらいの振動を生み出すことはできたようだ。

「銃弾よりも速くぶん回してやるよ」

振り下ろしたそいつを地面から引き抜き、今度は思いっきり振り回す姿勢を取る。体勢を崩していた男達は再び銃を構えようとする。しかし、できなかった。俺が振り回したそいつはおそらく男達の記憶の中で見たこともないような速度でぶん回されたのだろう。男達はかすかに「なっ」という謎の声を挙げながら吹っ飛んでいった。

「……しかし、この武器の本来の使い方とは異なるけどな」

「ならば正しい使い方を見せてもらおうかッ！」

突然聞こえた男の声。どうやら一人隠れていたようだった。そう

いえば男達の人数を確認するのを忘れていた。声のする方を向く。その方向は行き止まりとは逆の方向。つまり、俺が来た方向。いつの間にか後ろを取られていたのか。

間に合わないかもしれないが俺はそちらの方を向いた。ふむ。何が起こるか分からないのが日常か。なるほど。

「ぐへっ」

「あらら、逃げたのかと思ったのに」

「支払うものはしっかり支払いますから」

男はどうやら自分自身も後ろを取られていることには気づかなかったようで、後ろから追われていた女性に何かで殴られた。

何かを確認するためによく見るとそれは、さっき俺が破壊した道路の破片だった。

お仕事その3 レンガ(後書き)

リンク

6倍数の御題：<http://www3.totitle>

お仕事その4 役割分担(前書き)

2011:09:23

脱字を修正。

お仕事その4 役割分担

「それで、何で追われてるわけ？」

もうすっかり夜になってしまった。さびた看板、いつから使われていないのか分からないビル群。こんな古びた街を照らす明かりは街灯と月のみ。人の気配のしない裏路地を俺と女性は肩を並べて歩く。俺が言葉を発してから数秒後、彼女の口が開いた。

「理由分らないんですか？　もしかしてあなた、この街の人じゃないんですか？」

「何だよ、それ。この街に住んでたら誰でも知ってるくらい君って有名人なの？」

「いや、別にそういうわけでは……」

「まあ、雇い主が話したくないなら聞きはしないけど。それよりも何を支払ってくれるのか、それが気になるね」

「それは……」

突如、俺の隣から女性の姿が消える。いや、消えたわけではなかった。彼女の足が止まっただけだった。

数歩進んでからそのことに気づいた俺は、止まってしまった彼女の方を振り向く。顔を下に向けてしまった彼女の手は前で握りしめられたまま、震えていた。

口元をよく見ていなかったが、ふと彼女の声が聞こえたような気がした。もしかしたら今一瞬何かをつぶやいたのかもしれない。よく聞き取れなかったことを彼女に伝える。すると彼女はこう答えた。

「私の命でどうですか」

その言葉にきょとんとしてしまった俺が居た。傭兵人生を歩んできた俺の中で初めての報酬だった。

「……君も面白い人だな。何か裏があるのか？　それとも純粹？」

「この街に居れば、近々知ることになると思います。私の本性とそれに賭けられた賞金を」

「本性ねえ。そいつは一体どういうことなんだ、まさか二重人格とか」

「な、何でそれを！」

まさかの茶化すつもりで飛ばした言葉が真実だったようで。本気で彼女は驚いていた。平然を装っているが俺だって内心驚いている。真実が判明したところで、こんなところで会話を繰り返しているのも先程の奴等のお仲間さん方が到着するのを待っているだけだ。俺は彼女にどこか行く当てはあるのかを聞いてみた。

「一応無茶苦茶に逃げていたわけではないわ。この先に私の経営するお店があるの。そこなら隠れられるから」

「なら、道案内を頼もうかな。その代わりと言っては何だけど俺がある程度警戒はしとくから」

「なるほど役割分担ですね。分かりました」

一つだけ気になったことがある。そこが待ち伏せされていたらどうするのかということだが、それは聞かないことにした。

前言を撤回しよう。待ち伏せはほぼ不可能だ。

俺は確実に道が分からなくなった。裏路地と言われる場所がどれほどの複雑さで構成されているものかを思い知らされた。どの方角へ歩いているのか、どこから来たのか、同じ景色ばかりで何が異なるのかさっぱりだ。それでも、先導を頼んだ彼女は一心不乱に目的地へ進んでいった。彼女が一番恐ろしく思えた今日この頃。

混乱している俺の目の前で彼女の足が止まる。どうやら目的地に辿り着いたらしい。道に迷ったわけではないことを祈る。突然彼女が指を指した。指の先には看板で派手に「黒の管理人」と書かれた看板を掲げた建物があつた。周辺の建物といい勝負をしている。ぼるぼるだ。

「ここが私のお店。不動産屋を経営しています」

「ほお、追われてる奴が不動産屋か。それで、経営難で今にも潰れそうなんじゃないのか」

「お客様は無くならないです。だって」

そう言い残して彼女は店と言い張る建物の中へ入って行った。入ろうとした俺の目の前に再び彼女が現れる。厳密には俺の目の前には何かのメモ帳が現れたのだが。

見ると言わんばかりに差し出してきたので、彼女の手からメモ帳を受け取ると一枚目をめくった。この店の利用者だろうか。名前がいくつも書いてあるようだ。しかし、その隣には普通は書かれないような数字が書いてある。

「ここに借りに来るのは表じゃ借りられない顔を持った人達。それぞれがいろいろな目的で借りに来ます。隠れ家だとか静かに暮らしたいだとか」

「この隣にあるのは賭けられた賞金の額か。もしかして狙われてるのはこれか？」

「そうですね。どうやら誰がどこに住んでいるのかの情報を狙う方々が多いようです」

「なるほど。だから、君を殺すわけではなかったのか」

そう一言つぶやいた瞬間にもものすごい勢いで俺の手からメモ帳が奪われる。突然の出来事に「おっ」と言ってしまった。彼女の方を見るともう姿は消えていた。

夜になって少々寒くなってきたようだ。俺はあえて「寒っ」とつぶやきながら店の中へと足を進めた。

お仕事その4 役割分担(後書き)

リンク

6倍数の御題：<http://www3.tottitle>

お仕事その5 落し物

「はい、サンドウィッチです」

「どうも。とりあえず飯にありつけて良かった良かった」

テーブルの上に出された皿には一枚のサンドウィッチが無造作に乗っかっていた。そのうち一枚を手に取り、口へと運ぶ。中身は卵とハムがサンドされていた。まあまあな味付けだ。

「美味しい味付けを求めているなら表で食べてきてくださいよ」

いきなり女性が冷たい口調で俺にそう言ってきた。知らない間に口に出していたようだ。思いつきり批判を受けた俺。もぐもぐと口を動かしながら店内を見渡す。外からの様子と比べても酷い有様だった。

まるで中で戦闘を繰り広げたのかと思われるほど置かれている家具には、刃物で切った跡や銃弾で打ち抜かれたような跡まで残っている。店の床にしてみれば、いたるところで板がまるごと抜けており注意しなければ、足だけでも落ちてしまいそうである。同様に壁も天井も傷だらけである。一見すると何かの事故現場かと思えるほどである。

そんな店内の中でもきれいなものは一応ある。俺が今椅子に座りながら肘をついているこのカウンターだ。まるでバーにあるように長いそのカウンターは受付を行うだけに必要とされる領域をはるかに上回っている。口の中のサンドウィッチが消えたついでに口を動かして聞いてみる。

「受付にしては長いカウンターだよな。不動産屋の前は違う仕事でもしてたのか？」

「えっと、前この店を持つてた人がバーを経営してたって話は聞いたことがあります」

「まあこれだけ長いカウンターをバー以外の何に使って言うんだろっな」

「分かりませんよ、何か飲食店を経営していたのかもかもしれませんし」
そう言いながら彼女は、カウンターの向こう側で何かの書類を整理している。

なるほど。俺が今されているように向こう側から料理を出して、こちら側でそれをいただくという形式か。長い間の俺の食生活は自炊か雇い主からの配給、安くて不味い店の料理、同業者からの心無い同情だったからな。いろいろな事情でそれ以外には立ち入らないようにしてたからな。

俺は二枚目のサンドウィッチを口に運ぶ。今度はレタスとハムにマヨネーズのトッピングか。大好物だ。

「それで」

「はひ？」

すみません、礼儀作法がなってますでした。俺は口に食べかけのサンドウィッチを入れた状態で返事をした。そのせいで言葉はおかしな音で彼女の耳に届いた。彼女は俺を呆れた顔で見ている。俺でもそうするだろう。口の中身を急いで飲み込み、今度こそまともな返事を返した。

「さっきの武器はもう一度降ってきませんよね」

「降らせないで呼び寄せる方法もあるから心配しなさんな」

俺はズボンの右ポケットに手をつ込み、とあるスイッチを押す。実はスイッチには二種類あり、以前押したスイッチとは別のスイッチを押した。ちなみに、見せるつもりはさらさら無い。彼女の目は俺を信じられないと言わんばかりに疑惑を持った目と化している。急いで呼び寄せるとするか。

ポケットから出した右手を開き、手の平を俺の右側に向ける。すると、その手の平の先におぼろげな輪郭が浮かび上がり始めた。

「ほええ〜」

何とも言えない感想を彼女が言う。それに反応しても仕方がないので俺は微動だにしなかった。徐々に形が現れてきた。幾何学的な刀身。装飾も一切ついていない、ただ握り易さだけを求めたグリッ

ブ力のある持ち手。それが俺の武器。

実体化は完璧に完了した。一度これも失敗したことがある。子供の頃に間違えてゴミ箱を呼び寄せたことがあり、一種のトラウマとなっている。その場の戦闘は放棄したのもいい思い出だ。

「そ、それちよつと握らせてもらえませんか？」

「別に拒否はしないけれど持つことはできないと思っぜ」

彼女はカウンターの横から出てきて俺の武器の持ち手に触れようとした。その瞬間、何かの音が店内に広がる。俺はそれがすぐに何かが落ちたときの音だと分かった。なぜなら俺の目には何かが彼女のポケットから落ちるのを目撃したからだ。

「何か落ちたみたいだけど」

「触れちゃダメですっ！」

俺が手を伸ばしかけたその瞬間に、彼女は叫んだ。落ちたそれは一見すると……カード？ なぜ「触れちゃダメ」なんだろっか。それほど大切なものなのか。薄汚い汚れた裏社会の奴に触ってほしくないモノとか？ 自分で自分をそこまで卑下できる俺もすごいな。

「そんなに嫌がるなら別に触れることはしないけれど」

「良かった。実はそれ、触れると電撃を喰らうんです」

「へえ、それは面白い仕組みだな。触れると爆発したり、腕が切れたり、一生くつついたりする仕組みは知ってるけど初耳だな」

「冗談じゃないですからね、一応。あと、これから起こることも冗談じゃないので」

そう言うつと彼女は俺が振れることをあきらめたカードに触れた。

その瞬間、何が起こったのだろう。いや、ある程度の奇妙奇天烈が起きてても驚かない俺でもさすがに驚いた。触れた彼女の髪は突然くるくるのパーマがかかり始めた。彼女の顔がこちらを向く。彼女の変化がもう一つあることに気づいた。彼女の目は青色だったはず。今の目は黒色に変化している。すると、彼女の口元がやりと微笑みを浮かべた。そして、ゆっくりと口を開いた。

「こっちの顔では初めましてだろ？ 二重人格だってアンタ見抜い

たじゅん。これが裏のアタシ。何か文句でも？」
表は静で裏が動。典型的な二重人格だ。

お仕事その5 落とし物(後書き)

リンク

6倍数の御題：<http://www3.tottitle>

お仕事その6 最低限

「二重人格というより人としての本質が変わったみたいなのがするぜ？」

「惜しいところまで来るね、アンタ。詳しいことは話すほど親しくないからしないけれど、そういう類のもんよ」

「ふ〜ん」

突然変身した女性は、触れていたカードを右手の中へ収めると、カウンターの中へと入って行った。さきほどの彼女の言葉からすると記憶の共有はできているものの実質的な意識は変化するということか。俺の武器に一切触れないまま戻るとは。

店の扉が開く音がした。古い建物であるが故に木々の軋む音が想像以上に響き渡るのがこの店のウェルカム入店時の音。そのせいで嫌でも入店したことに気づかされる。

それにしても、さすが裏のお店と言うべきか。もう真夜中だと言うのに客が来るとはな。

「基本的には夜にしか開かないの、このお店」

いつの間にか口に出していたのだろうか。俺は大して驚きもしないでその会話に乗っかる。

「そういう類のお客を相手にするためだな」

「そういうことよ。それで、アンタはどういったご用件なのかしら？」

俺との会話に一区切り終えさせ、たった今入店されたお客様に声をかける彼女。全身をとどころ薄汚れたローブをまとっているため、その体の特徴がよく分からない。身体の大きさからしてまだ子供なのではないだろうか。ちなみに、縦の大きさだ。そのお客様がこちらに向かって歩いてくる。歩いているときに見える足元は、どこをどう歩いてきたらそうなるのか分からないほど傷ついた裸足。そして、そいつは俺の隣まで来ると頭に被っていたローブを

脱ぐと彼女に向かってこう叫び始めた。

「へ、部屋を貸してください」

彼女の目は突然何かを冷たくあしらうような目に変化する。その状態の目がローブを脱いだお客様の隅々を、まるでチェックするかのように見ていた。ローブを脱いだお客様は、髪をいつから整えていないのか分からないくらいいぼさばさの長髪で、黒いのか茶色いのかよく分からないくらい汚れてしまった髪質。そして、いつから体を洗っていないのか分からないくらい顔は汚れていた。それでも、声から少年であることがうかがえる。

彼女のその行為が何かの審査なのかよく分からないが、その目が再びお客様の顔に戻ると、彼女の口は開かれた。

「何に使うつもりで？」

「じゃ、借金取りから逃げるんだ。そのために隠れる場所が必要で彼は彼女の顔から目をそらすように下を向きながらそう答えた。

震えるようなその声には、おそらくわずかな希望とこれを拒否された時のこと、それからの絶望を考える恐怖が感じられた。問から返ってきた答えを聞いた彼女は次にこう言った。

「いいわ。それでは契約のお話ですが、あなたに賭けられた懸賞金はいくらかしら？」

「け、懸賞金……」

突然の言葉に驚きを隠せないみずぼらしい少年。隠せない驚きは下を向いていた彼の顔を思わず彼女の方へ向けてしまうほどの力を持つていた。少年の言葉に彼女は「ええ、懸賞金」とだけ答えて、この場では悪魔にしか見えない微笑みを少年に見せた。

「無いです」

「あらあごめんなさいね。どこの噂を嗅ぎつけてやってきた子犬ちゃんだか知らないけれど、ウチの借りるための最低限の条件は『懸賞金』とか『裏社会での有名度』みたいなものが必要なの？ 見たところお客様は裏社会で有名ではないような方に見えたので懸賞金の方をお尋ねしたのですが。すいませんね、出て行ってもらえます

？」

少年の言葉を引き金に彼女の口から次々と言葉の弾丸が放たれた。最終的には少年を突き放す驚異的なミサイルが放たれた訳だが。

それでも少年は引き下がろうとしない。その目を意志ある目に変えて。

「い、嫌ですっ！ 絶対に借りて、借りて帰りますっ！」

「黙れよ小僧」

銃弾が放たれる音が高らかに響き渡る。比喻表現ではなくこれは実物。俺の目には少年の右肩の上の辺りを銃弾が飛んでいくのが確認できた。少年は目を丸くした状態で彼女の方を向いたまま動かなくなつた。彼女はと言うと、左手に銃……にしては幾何学的な形状をしたモノを構えて立っていた。

「こつちも商売なんだよ、分かんねえのか小僧。アンタのその威勢を使ってなあ裏の世界で大暴れしてきたなら貸してやるよ。それが無理ならちつちやく這いずり回って有名にでもなつてきな」

「うっ」

大抵の少年はそうなるだろう。どんな事情があつたのかは分からないが、借金取りに追われ裏の街のこんな不動産屋に隠れる場所を借りに来るならば、そうとうな苦勞をしてるんだろう。世間一般的なレベルで計るとだが。それに少年と言う年齢であることも原因の一つにあるだろう。何の原因かと言うと。

少年は大粒の涙を両目に浮かべていた。そして、涙声で、もはや何も聞き取れないようなその声で、こう言つて店から姿を消した。

「ありがどヴございました！」

「すばらしい感謝の言葉だな、あの少年。まさかあの状態でお礼を言つて出ていくとはな」

空気と言う称号を手に入れても良いと思うほどずっとやり取りを見ていた俺は彼女にそう言葉を投げた。彼女は銃と思われるモノをカウンターの上に静かに置いてから、俺に言葉を返した。

「たまに来るんだよねえあんな野郎ども。でも現実見せてるだけだ

よ、現実。そもそもローンが払えなくなったらそいつの懸賞金で払ってもらう契約になってるんだから」

「くくく、なるほど。損はしないビジネスになってるってわけか」「そういうこと」

思えば仕事を済ませた後の出来事だった。連続で起きていた。俺の体は悲鳴を上げていた。つまり、そろそろ眠りにつきたくなくなってきた。

彼女に眠るための部屋を貸してくれと言つと、まるで先程の契約のようなやり取りをさせられたので、俺は「そういう冗談はいらないから」と言つづやいた。彼女はにやりと笑みを浮かべた後、部屋の場所を教えてくれた。

カウンターの隣には扉があり、その扉が二階へとつながる階段への扉だった。二階の部屋を好きに使ってくれと言われたので、階段を上がって右側の部屋に入った。もちろん武器を持ってである。その部屋は限界までコスト削減に費やした部屋が広がっていた。テーブルとベッドしかない。

「寝る」

誰もいない部屋でそうつぶやいた俺は、武器をテーブルの上に置きベッドに倒れこんだ。

お仕事その6 最低限(後書き)

リンク

6倍数の御題：<http://www3.tottitle>

お仕事その7 使い方

それは朝の出来事だった。

朝日が一切入ってこない裏路地に建てられた建物の二階で寝ていた俺。一応仕事をこなした次の日なので体が疲れているのは当然のことだった。それを言い訳にして朝なんか来なくていいからそのまま目が覚めたら昼も越えていましたって感じになることを望んでいた。

無理だった。

「おはようございます。一応、朝ご飯を持ってきましたけど」

この建物をリフォームするべきだと思う。いや、それが無理ならばこの部屋だけでもリフォームして欲しい。ドアの開け閉めの際に生じる音はまさに不協和音そのものだ。名付けて安眠妨害システム疲れている仕事人には勘弁してほしいシステムである。

邪魔された安眠から現実世界へと戻ってきた俺は、ドアを開けたままこちらを見ていた女性に「どうも」と寝起きの顔で一言礼を言った。それを聞き取ると、彼女はにこりと笑ってドアを閉めた。不協和音再び。寝起きの機嫌がさらに悪くなる。壁の防音など無いに等しく彼女が階段を下りていくのが丸聞こえだった。

ため息を吐く俺。とりあえず持つてきてもらった朝飯をいただく。ベッドを除く唯一の家具、テーブルの上に置かれた朝飯に目を移す俺。

ザ・サンドウィッチが二つ。思考が停止した。

「まあ飯にありつけてるだけ感謝すべきか」

不機嫌度最高状態でサンドウィッチに手を伸ばす。中身が昨日とは変わっていたことに少なからず嬉しさを感じ、機嫌を良くする俺だった。今日の中身は、一つがトマトとレタスとキュウリにマヨネーズのトッピング。もう一つはスクランブルエッグにトマトケチャップ。不味くはない。

無言でそれらを平らげる俺。ふと、気づく。

武器はどこに行った？

無駄な空きスペースがありすぎるこの部屋の中にそれらしき姿は無い。まさか。

「私が握った瞬間に銃のような形に変形してしまつて」

「……見せてみな」

「そ、それで突然根っこのようなものが伸びてきて、手に固定されてしまつて」

カウンターの上に出された彼女の右腕。右手はしっかりと俺の武器を握っている。いや、握るような状態で動かないのだろう。その銃の弾倉部分から伸びる木の根のような部分が彼女の右手首にしっかりと絡みついてしまっている。

カウンターの向こう側から己の腕を見せている彼女の表情は困惑を隠せない。逆側で座りながら絡みついてしまった部分を見ている俺は、ため息を吐く。そのため息をどう受け取ったのか彼女は焦りながら口を開いた。

「もう戻らないとか!？」

「馬鹿野郎。俺の武器なんだからちゃんと返してもらうに決まってるんだろ。俺の武器は特殊な武器で、握った人の戦闘スタイルに合わせて形状変化する武器なんだよ」

「形状変化？」

「そう、お宅はどうやら銃による戦闘を得意とする……まああつちの顔が得意そうだからな。だから、コイツは銃になつたんだろう。だがしかし、そう簡単には使えないのさ」

「あのお、武器の説明はいいので早く戻してくれませんか？」

正論である。

俺は彼女の右手に手を重ねる。突然の出来事に彼女は目を大きくして驚いたが、俺は「まあ見てな」と一言つぶやいた。重ね合わせたその瞬間から彼女の右手は光り始めた。そして、数秒が経った。

「戻った……」

光が治まると同時に彼女の右手から銃は離れ、カウンターの上に四角い銀色のキューブが一つ転がっていた。これが俺の武器の大元。転がっているキューブを右手で握ると、元の幾何学的な刀身を持つ俺の武器に戻った。これが俺の武器の戦闘形状。

「あなたの武器であることは分かりましたから」

「どうやら俺の武器ということを連呼したことに腹を立てたらしい。さすがに、しつこ過ぎたか。」

「それにしても何で離れなくなってしまったのです？」

「この武器にも使い方があったよ、使い方が」

そう言いながら俺は武器を指差した。そして、思い出したようにさっき食べた朝飯の皿をカウンターの上に出し、「ごちそうさま」と一言つぶやいた。

お仕事その7 使い方(後書き)

リンク

6倍数の御題：<http://www3.tottitle>

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9075w/>

傭兵さんのただ働き物語

2011年9月25日01時21分発行